

塩越すかひの秘密

昭和中学校三年 面道 すみれ

私には忘れられたい思いがあります。あれは、私がまだ5歳の時の運動会のリレーの日の。私は一メートルを前にして、わくわくした気持ちでいっせいでした。中でも一番楽しみにしていたのは、たく士んの障害物も乗り越えてから、最後に跳び箱を跳んでゴールする障害物競走です。これだけは負けな

いぞと、とても張り切ったいました。

位置にっいて、よいいドンッ  
その瞬間、私は無我夢中で走り出します。そして、一たび跳び箱の助走ラインにたどり着き、パンツを大きな音もたえて踏み切るときにはもう勝利を確信していました。しかし、何かがおかしいのですか。みんなが逆立ちして、いそよそに見えろのです。なに、なに、気がついたなら、私は跳び箱のトの上でうつ伏せになっ、ていて、先生や友達に囲まれていました。何が起きましたのか分からないうけれど、

涙が止まりません。みんなが声をかけよくれ  
てい子けれど、何も言ってる子のかけ分かれ  
ません。すみれちゃん、大丈夫じゃけん。こっ  
ちおいでい。お母さんの優しい声だけが耳に入  
った。お母さんは泣いていて私もおんぶして  
日陰まで連れて行き、私を落ろ着かせながら  
命あったことを話してくれました。私は熱い  
余って高く跳びあがってしまい、跳箱に手を  
つくことができません、顔からマットに落ちてし  
まった。たもうです。傷だらけの顔がものすごく  
恥ずかしくて、みんなに楽しめなくていた運  
命命が嫌になっちゃいました。落ち込んで  
下を向いていると、はいと目の前に、半分  
に割れたおにぎりが出てきました。お母さん  
が、自分の昼ごはんのおにぎりを半分私にこ  
れたののです。海苔も巻かれていない、真、自  
塩むすび。私はずれまで、具が入ってない  
と嫌だと言った、塩むすびを食ったことがあ

りませんでした。けれど、お母さんが私を励  
ましてくわえてくれた。思い出、いやい  
や口に運ばと、おさま。ていた涙が再び止ま  
らなくなりました。なんで泣いてい  
るのか自分で自分からはいけれど、喉を込  
ながら必死におにぎりも口に入れました。涙  
でぐちゃぐちゃになつた顔で  
「こんなにかいしくて甘いかにぎりを初めてい  
と、言うよ、」  
元気が出た魔法もかけたけん、これ食べた

う大丈夫よ  
と、笑顔で頭を撫でてくれました。  
特別なものではないけれど、あの時の塩が  
すいかからは、たっぷりの愛情と、母の手の如  
くもりを感じました。素朴な、でもなんだが  
元気が湧いてくる。和の大切さ母が私に  
しかうてくれないあの味は、一生忘れられませ  
ん。そして、あの日から私は塩かすびが大好  
物になりました。初めて米の、甘さ、に原  
質、ゴ飯の甘さと塩のしょっぱさが混ざり

合う絶妙なかいし士の立場にな。たのぞく。今  
では、弟が野球をすゝ時や、妹のお腹が空い  
た時に、塩をすかきもつこのが私の日課とな  
りました。このかゝ私の子供にまつことであ  
げて、毎日当たり前のようにお米が倉へ入れ  
ることに感謝しなければならないと、伝えら  
れた。また、このため、お米一粒一粒を  
味わって残さず食べることに、お米の命と農家  
さんへの感謝を、いかに生かすか、と、ごう  
けいさんと言ひつゝとを繰り返してまいり。